



2010年7月8日（動機編）

A男「英語か・・・。」

B子「英語ね・・・。」

A男「そうだ。まず会話始める前に、我々の立場を読者に明かそうじゃないか。」

B子「そうね。まずそれが必要ね。」

A男「我々はこの小説の作者の頭の中にあるキャラである。

そこに君と僕との間で、基本的な認識の相違はないね。」

B子「ええ。ないわ。」

A男「加えてこの小説の作者は英語ができない。そこで彼は自分が英語の学習をする為のモチベーションを維持するために我々を創造した。」

B子「・・・・・・・・。」

A男「・・・何を考えてる？」

B子「多分あなたと同じことだわ。」

A男「この作者が人間の屑であるということか？」

B子「屑・・・ずいぶんと寛大な評価ね。」

A男「気を取り直して、英語の話をしようじゃないか。まず、基本的に認めなくてはならないことは我々の英語力はこの小説の作者を超えることはできない。」

B子「認めたくないけど真実だわ。これはこの小説のリアリティレベルの限界よね。普通のフィクションだったら、彼女は英語を流暢に話したと書いて、その後、英語で言ったことになってる日本語を表記すれば済むのにね。」

A男「では、何故作者が我々を創造したのか。

例えば、こんな例文

"I wanna be your woman."

どうに訳す？」

B子「私はあなたとやりたい。か私はあなたの彼女になりたいか。か食肉用として私をあなたに提供したいかどれか」

A男「最後は絶対はないと思うが、つまり言えるのは我々日本人は英語を日本語に翻訳する段階で、英語が本来持っていたニュアンスというか関係性というかみたいなものを脱色してしまうらしい。」

B子「だいたい、このwannaというのがニュアンスとしてよくわからないよね。これが"なりてえ。"みtainのか"なりたいぜ"みtainなのか微妙によくわからない。」

A男「そう。英語を日本語に翻訳する段階で記号化してしまうことが英語習得を妨げているのだ。」

B子「例えば、例文

"I love your lovers"」

A男「言っている内容が恐ろしいが、それ以上に恐ろしいのはloversが複数系であることかな？」

B子「そして私達はこの英文でネイティブがどのように感じるのかどう
」

か判断できない。

A男「それは作者が英語ができないからだ。」

B子「そう。私達がキャラとして自律的に会話する為には作者の英語力
の向上が絶対に必要なのよ。それにこの小説の作者は過去英語力
ができないために棒に振った就職先は1社や2社じゃなかったは

ずよ。」

A男「つまり3社あったわけだ。」

B子「そのとおりよ。」

A男「では早速明日は、他動詞について語ろう。その間に作者は他動詞
おくに違いない。」

について勉強して

B子「信頼していいのかしら」

・・・明日に続く。